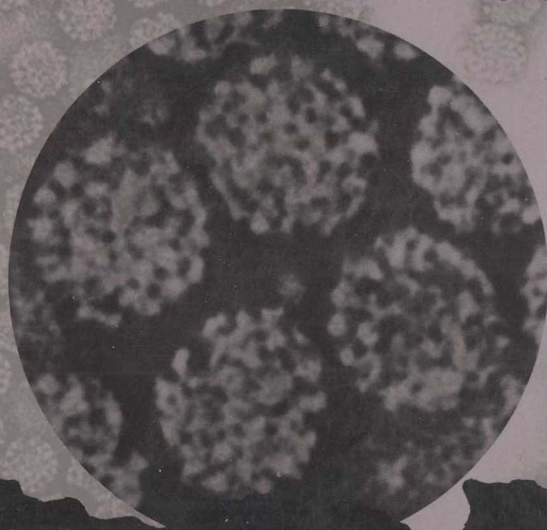


ジョン・G・フラー著 宮祐二訳

熱病

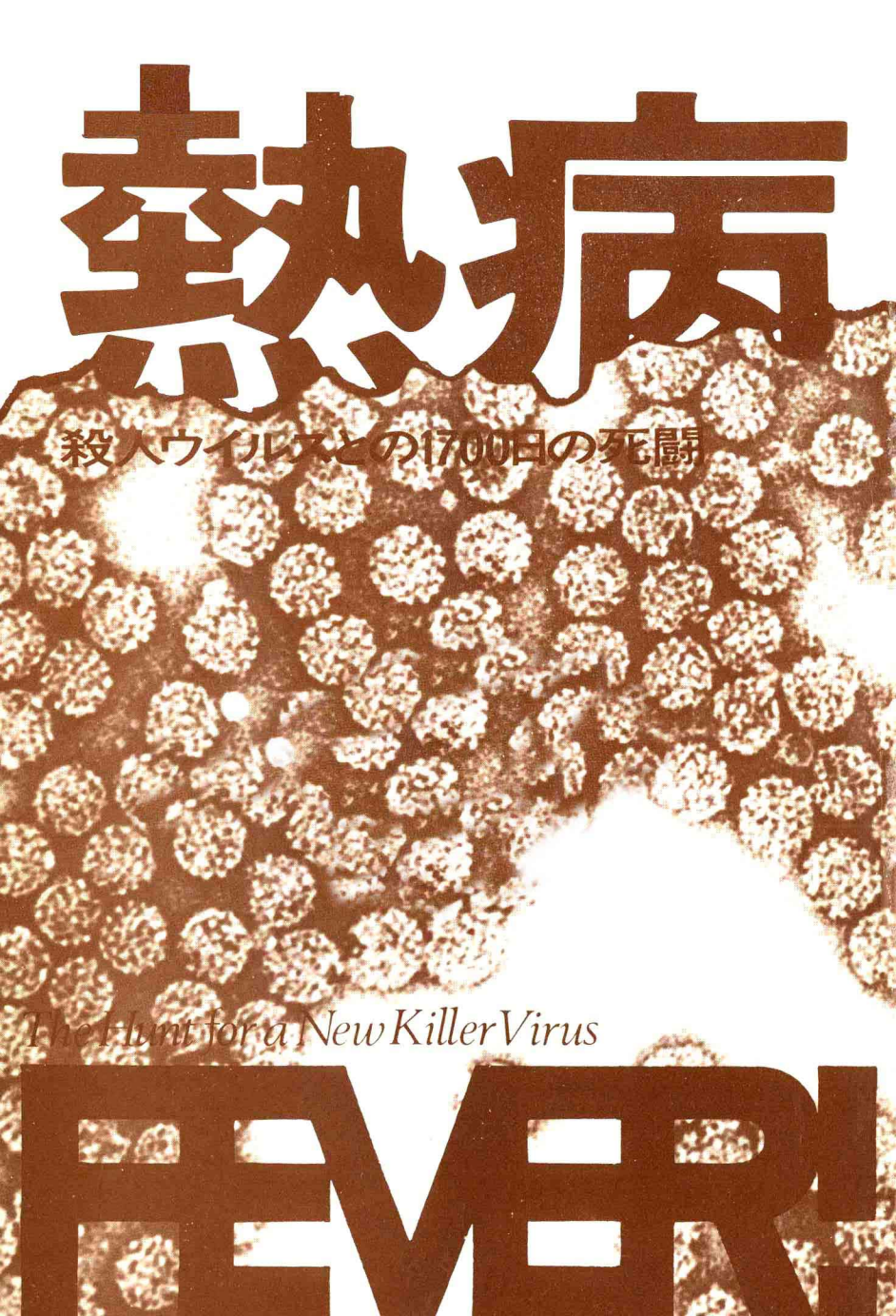
殺人ウイルスとの1700日の死闘



The Hunt for a New Killer Virus

EBOLA

熱病



殺人ウイルスとの1700日の死闘

The Hunt for a New Killer Virus

FEVER!

熱病—殺人ウイルスとの1700日の死闘



1976年4月15日 第3刷発行

¥ 1,200

熱病—殺人ウイルスとの1700日の死闘

ジョン・G・フラー著

宮 祐二訳

発 行 者 下 野 博

印 刷 所 信毎書籍印刷株式会社

株式会社 美術版画社

発 行 所 立 風 書 房

東京都品川区東五反田3-6-18

電 話 東 京 447-1191 (代)

振 替 東 京 5-74493 ㊦141

0097-R9309-8909 乱丁・落丁本はお取り替えます

熱病

—殺人ウイルスとの1700日の死闘

日本語版翻訳権独占
立風書房

© 1976 Rippu Shobo

FEVER !

The Hunt for a New Killer Virus

by

John G. Fuller

Copyright ©1974 by John G. Fuller

First published 1976 in Japan by Rippu Shobo Co., Ltd.

This book is published in Japan by arrangement
with International Famous Agency Inc., New York
through Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo

目次

	序文	7
第一章	悲劇の幕開け	9
第二章	相次ぐ死	29
第三章	ニューヨークへ患者空輸	58
第四章	組織培養実験と動物実験	90
第五章	恐るべき新型ウイルス	114
第六章	殺人ウイルスの正体	138
第七章	健康警告書	160
第八章	黄熱病の蔓延	181
第九章	エール大学研究中止	203
第十章	一粒の麦	234
第十一章	初発病者の追跡	259
第十二章	勝利、そして闘いはなおも	278
著者あとがき		295
訳者あとがき		311

主な登場人物

●ラサ同胞教会病院

ジョン・ハマー……………伝道医師

エスター・ハマー……………ジョンの妻

ローラ・ワイン……………伝道看護婦

●スーダン・インテリア・ミッション病院

ジャネット・トゥループ……………伝道医師

ペニー・ピンネオ……………伝道看護婦

シャーロット・ショー……………伝道看護婦

ドロリス・ロー……………伝道看護婦

ドロシー・デイヴィス……………伝道看護婦

ハル・ホワイト……………医療講習所所長

●イバダン大学

グラハム・ケンプ……………ウイルス学者

ドナルド・カレー……………ウイルス学者

●コロンビア大学

ジョン・フレーム……………熱帯病学者

エド・ライファ……………伝染病学者

ロジャー・ウイリアムス……………昆虫学者

●エール大学

ウィルバー・ダウンス……………昆虫学者

ジョーディ・カサル……………微生物学者

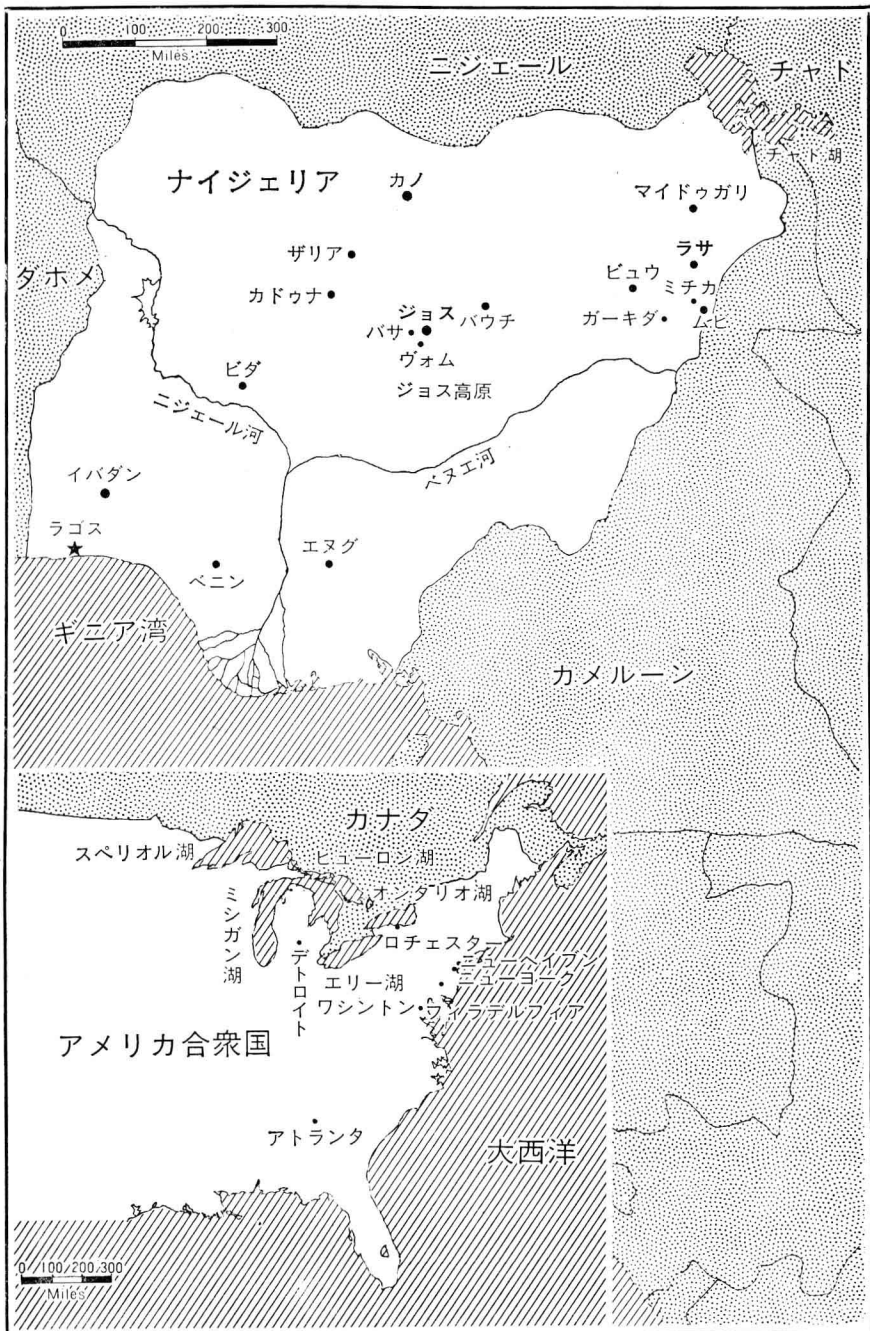
ロバート・ショー……………ウイルス学者

ソニヤ・バックレー……………ウイルス学者

●アトランタ疫病対策センター(CDC)

デイヴィッド・センサー……………センター部長

ブライアン・ヘンダーソン……………ウイルス学者



「だがこれで事態の收拾はついた」とストーンはいった。「生物が手に入ったのだから、これを継続的に研究すればよいわけだ……われわれは突然変異に関していまどんなことが生じているか理解している。大切なのはそこなんだ。それはよくわかっている」

——『アンドロメダ病原体』（マイケル・クライトン著）より

序文

この物語の資料を集めるにあたって、最も困難に感じたのはこれがすべて真実であり、記録によって実証されているのだと絶えず自分にいい聞かせなければならぬことであった。一連の出来事がありながらも奇妙でショッキングで悲劇的なので、私はランドローバーに乗って淋しい伝道所をナイジェリアの端から端まで歴訪し、アトランタ疫病対策センターの研究所やエール大学のウイルス実験室を訪ね、各地に散在するこの物語の当事者に取材におもむく道すがら、これは現実にあったことではなくて、一種のサイエンス・フィクションのようなものではないかという気がしたほどである。

ところが、ウイルス学者も医師も伝道師もナイジェリアの部族民も科学者も、すべてが架空の人物どころか勇敢で献身的な実在の人物なのである。彼らの多くはそれぞれ不可解な成り行きで死んでいった。彼らの経験したことは事実であり、粉飾や誇張は一切加えられていない。

この物語の細部はすべて生き残っているかたがたとの長い骨の折れるインタビューから慎重に再構成されている。数回にわたるインタビューを列記することによってはじめて立体的なイメージを現出することができた。これは一度のインタビューをもってしては到底不可能であつたろう。記憶にわずかも

食い違いが見られる場合には、その事件と最も直に接した人の報告を使用した。よほどはっきりと記憶に残っていないかぎり、対話を生の形で出すのは極力控えた。

その他の資料は病院の記録、医療関係の定期刊行物、合衆国公報、関係者の書簡、覚書、日記などから集めた。

一九七三年二月

ニューハンプシャー州ピーターバロー

ジョン・G・フラー

第一章 悲劇の幕開け

夜中にふいに起きれることには慣れっこになっていたが、一九六九年一月十九日、日曜日、午前三時過ぎにドアを叩く音に目を覚ましたとき、ローラ・ワインは背中の痛みが一層激しくなっているのに気づいた。彼女は懷中電灯を手さぐりしてやっと見つけ、厚い蚊帳を透かして照らした。セメントの床に毒蛇がひそんでいないのを確かめると、彼女は蚊帳を引きあげ、スリッパをさかさにしてこつこつ叩いてから履いた。サソリがスリッパの中に忍び込んでいるおそれがあるからだった。

彼女は大声で直接病院に向くとこたえて、ドアの傍のテーブルの石油ランプをともしにかかった。彼女の看護服はベッド脇の椅子にきちんと置かれていた。彼女は急いでそれに着替えた。屋根裏では、庇と波形のトタン屋根の間で蝙蝠がせわしげにはばたいていた。

ローラ・ワインはそろそろ七十に手が届こうという高齢だったが、彼女の知人はたいてい六十そこそこだと思っていた。彼女は小柄で、ものわかりのよい母親のような顔をしていた。その顔を砂色の髪が縁どっていた。動作が活発なので、外見からはその年齢も背中の痛みも窺うことはできなかった。

ランプをとり上げると、彼女はドアから杖を手にして用心深く戸口に出た。アフリカの夜は静かで暑

かった。毒蛇に絶えず気を配っていなければならなかった。しかし、毒蛇は光を恐れ、草を払う杖の音を恐れ、そそくさと茂みに逃げ込むのだった。彼女はシカゴとその郊外で人生の大半に当たる六十五年以上を過ごしたが、ナイジェリアに来てから四年間の生活で、そうした恐るべき毒蛇に対する恐怖心はなくなっていた。とはいえ、彼女は毒蛇による事故をいやというほど目撃しているので、決して彼らを見くびってはいなかった。鼻血をしたたらせ、顔を腫れ上がらせた患者の静脈に蛇毒血清を注射するようなことも彼女は幾度も経験した。

数百ヤード離れた奥地に小さな病院があった。ガソリンを使った発電機が鈍いなり声をあげながら、数個の裸電球を夜通し照らしていた。ミス・ワインは盲人のように杖で軽く前を払いながら、埃っぽいランドローバーのわだちに沿って、灯りに向って足早に歩いていた。手にしたランプがタマリンドの樹林の黒々とした輪郭や、ほとんど彼女の背丈ほどもある砂地の城のような白蟻の塚を照らし出していた。イナゴの単調な羽音が聞えるだけであたりは静まりかえっていた。何マイルも東方では、カメルーン高原に通じる大草原で燃え続ける野火が、無気味な輝きを放っていた。

ラサ病院の構内にある、低いずんぐりとした、泥とセメント造りの産科病棟では、村の妊婦が汗まみれになって出産間際の陣痛に身もだえしていた。ベッド脇ではナイジェリア人の看護婦がローラ・ワインの到着を待ちわびながら部族語でやさしく話しかけていた。

赤ん坊は夜が明けて間もなく無事に生れ、ミス・ワインは少し休息をとり自宅に引き返した。ラサ伝道所の構内にある他の三つの建物の一つでは、エスター・ハマーが自分で栽培し缶詰にした野菜と新鮮なポテトと土地の市場で買った山羊肉を使って日曜日の午餐の準備を始めた。蠅が干ブドウのように肉に群がっており、完全に火を通す必要がありそうだった。ウエスタン・リザーブ看護学校から初めて

ここにやってきたのが一九五二年。それ以来ハマー夫人は薪まきを用いる小さなかまどの使い方にすっかり慣れていた。

彼女は伝道所の唯一の医師である夫のジョンとラサにやって来たのだった。二人はアフリカでの医療普及員になるのだという若々しい夢を抱いていた。二人はインディアナ州のマンチェスター・カレッジで顔見知りだったが、ウエスタン・リザーブで再会するまでは一度もデートしたことがなかった。ジョンはウエスタン・リザーブで医師の資格を取得したのだった。各自四十五ポンドもの荷物を携もたえてナイジェリアに着いたとき、気持が高揚していたので不安感などの入り込む隙はなかった。また使命感に燃えていたので、辺鄙へんぴな西部スーダンくんだりまでやってきたのだという孤独感とも無縁だった。

アフリカの秘境スーダン。サハラ砂漠の下方を太い帯のように東西に連なるスーダンは、かつては金目当の外国貴族から探検家、伝道師、奴隸商人にいたるまで誰にとっても無限の魅力を秘めていた。ラサは人口一千、藁わらぶきの屋根と土壁の小屋の建ち並ぶ遊牧民の寒村で、北部ナイジェリア領スーダンの辺鄙な村里の典型である。エドセラム河流域で、ナイジェリアとカメルーンを隔つ鋸齒状きょしの無気味な高原地帯の麓に当たるラサは、雨が降り続きタイヤがぬかるみに空回りする一年の半分は事実上立ち入りが不可能である。だがこんな土地に同胞教会はハウサ、フラニ、マージ、ハイジ、その他の部族民のために不屈の意志をもって一九二〇年代に病院を建てたのである。伝道師団はこれらの部族民たちに対する改宗と医療奉仕の必要性を痛感したのだ。

今は一月で、泥沼のかわりに、どこもかしこも目を刺激する赤茶けた埃だらけだった。乾季に入ると、もうもうと舞い上がる砂埃に乗って脳脊髄膜炎が北部の大草原一帯に猛威をふるうのだった。ラサ

地域だけで発生件数が五百を越すことさえあった。

こうした砂埃による不快を多少なりとも和らげてくれるのはサハラ砂漠から吹いてくるハーマッタンと呼ばれる乾燥した熱風だった。この風はタルカムパウダーのようにきめの細かい、セメントとまがうばかりに濃いスモッグを発生させるが、涼気があるので、時には四八度以上にも上がる気温からしばしの間解放してくれるのである。ハーマッタンの鉛色の煙幕を透して太陽がのぞく図は、さながらバナラ・ミルクセーキのあぶくに漂うアルカ・セルツァー錠(アセチルサルチル酸ソーダ、重曹、クエン酸ソーダ等を含む錠剤で宿酔薬)のようだった。ハーサ部族の諺で「ハーマッタンが吹くと気がふれる」というのは誇張ではない。

日曜日の午餐の準備をすまずと、エスター・ハマーは夫と連れ立って村の教会に礼拝に出かけ、ローラ・ワインが来ていないのに気づいて驚いた。夜中に産科病棟に何度も出向いたときでさえ、ミス・ワインは礼拝には必ず出席し、ハウサ語かマージ語でお氣に入りの賛美歌を熱心に歌うのが例だった。もっとも彼女はいつまでたってもどちらの部族語もマスターできないでいるのだった。

お勤めが終ったあと、ハマー夫妻はミス・ワインが構内を自分たちの家に向って歩いてくるのを見てほっとした。日曜日はいつも一緒に食事をとることにしていたから、これでは普段と変わるところはなかった。ワインは独身だった。仕事への献身、それが彼女の唯一の生き甲斐だった。自発的に超過勤務につくことが多いので、同僚の方からどうか休養をとってくれと彼女に頼むほどだった。ラサでの彼女の仕事はある夢を実現させることでもあった。それは、彼女が昔シカゴやミネソタ州や北西部の大学で公衆衛生の訓練を受けていた頃からすでに口にしていた夢であった。だが、結核の病歴があったためにアフリカでの治療活動を断念して、シカゴに近いオーク・パーク・スクールの看護課程を指導することで

満足しなければならなかった。

さらに、彼女はシカゴの黒人貧民街にあるペサニー病院で医療活動に従事し、教鞭をとった。彼女は仕事に打ち込んだ。かつて、シカゴの街路で追剥^{おぎな}を撃退し、平然として勤務についたことがあった。六十五歳になり、自分の病歴が決してハンディキャップにならないこと、そしてアフリカでの医療活動を始めるにふさわしい年齢であることを同胞教会に説得し、納得させた。彼女は無給の志願者として渡航した。金銭的な面にはまるで関心がなかった。ずっと以前の話だが、彼女は少ない収入の三〇パーセント以上を慈善施設に寄付しているという理由で再三税務署から呼び出しを受けた。猜疑^{ぎぎ}心の強い税官吏にはとても信じられないことだったのだ。

構内を横切ってこちらにやってくるローラ・ワインを眺めながら、エスター・ハマーはあることに確信を抱いた。それはミス・ワインがいつもとは様子が違っているということだった。彼女の歩きぶりはぎこちなく、いつものように背筋を伸していなかった。ミッシェンの寄宿学校から休暇で帰宅しているハマー夫妻の幼い二人の娘に挨拶するときも、いつもの生気あふれる笑みは見られなかった。

午餐の途中、ラサに通じる埃っぽい道路わきで、マージ部族の婦人が分娩したところだという知らせが届いた。産科部門の責任者としてローラ・ワインはテーブルから立ち上がって、外で待機しているランドローバーのところに同行こうとしたが、背中に激しい痛みを覚え、再び椅子に腰を降ろした。エスター・ハマーは、この仕事は私が引き受けると強く主張し、ランドローバーに乗せてもらって帰宅するよう、ミス・ワインを促した。

ローラ・ワインは素直に応じた——これもいつもの彼女にはおおよそ考えられないことだった。彼女はかろうじてランドローバーから降り、のろのろと歩いて家に入り、やっかいな蚊帳を押し分けて、服も

脱がずにベッドに横たわった。彼女の不快感と背中の痛みとが、近代医学史上最も恐るべきエピソードの一つの発端となろうとは、本人はもとより誰も気づかなかつた。それは一連の思いもよらぬ騒ぎを巻き起こし、アフリカから合衆国に伝播し、世界の指導的医学者たちをして立ち上がらせることになるのだ。

日曜日の夕方になるとローラ・ワインはいくぶん気分がよくなった。起きあがってはいけなさとエスター・ハマーがいったが、彼女は制服を着てラサ病院に顔を出した。ほとんど誰もが彼女が倒れたのは軽い関節炎と産科病棟での早朝の長い勤務からきた疲れとが重なったためだ、と思っていた。ミス・ワイン自身そう思っていた。彼女は例によってきびきと雑用にとりかかり、孤児のために粉ミルクを掻き混ぜ、入浴させ、食事を与え、おしめをとり換えた。乾季とハーマッタンの到来を間ひかに控えて病院は忙しかった。六十五台のベッドしかない病舎は百人近い患者ではちきれそうだった。ベッドにあぶれた者は床に寝ていた。アフリカの慣例で、病院側は食事を提供しないことになっていた。構内は——回教徒、キリスト教徒、異教徒の別なく——身内の病人に食事の用意をするハウサ、フラニ、マージなど各部族民の家族の使う火で輝いていた。彼らはでき上がった食事を大切に病棟へ運ぶのだった。

ローラ・ワインはその夜早めに病院を出ると歩いて家に帰った。土壁の表面をレンガで補強した、こぢんまりした住み心地のよい家だった。構内にあるほかの三つの伝道師の家と同じく、円錐形の藁ぶきの屋根を特徴とする村の丸い土壁の小屋とは対照的に、彼女の家はシカゴ郊外の小住宅に似ていた。だが家に一步入ると、家具といえは色のくすんだ伝道用の家具があるだけだった。

彼女の隣人にはハマー夫妻のほかエルシーとフォン・ホールがいた。二人は地域社会の発展に献身